

研究テーマ：越境実践と生活圏構築の文化人類学的研究

・台湾と沖縄の境界領域にみる交渉と記憶から

研究代表者（職氏名）：助教 上水流 久彦

連絡先（E-mail 等）：0824-74-1704

kamizuru@pu-hiroshima.ac.jp

共同研究者（職氏名）：筑紫女学園大学准教授・森田信也、福岡大学講師・宮岡真央子

1 研究結果の要約

平成 19 年度の申請書は台湾と先島諸島の越境現象のみを考えていた。だが、独創性、対費用効果が問題であるとの不採択理由をもらった。そこで、対象地域を台湾と先島諸島から、韓国と対馬に広げ、かつ、東アジアの政治状況の影響も加味した申請書とした。その結果、採択との通知を受けた。

韓国・対馬と台湾・沖縄の交流が生まれる背景には、ともに船でも行き来ができるほど距離が近いこと、植民地時代と同じ大日本帝国の領土であったことがある。だが、詳細に見てみると、交流を活発にする要因は異なっていた。韓国・対馬での交流では、不安定な日本と韓国の政治的関係がその交流を促進する重要な一要因になっていた。領土問題が、韓国における対馬の注目度を向上させている点もあった。他方、台湾・沖縄の場合は、文化的親近性、植民地時代に日本本土から差別された類似した体験が基層にあった。そこでは、日本と台湾の良好な国際関係が意味を持っていた。

共通する課題も存在した。先島諸島、対馬が国内観光の成功体験をもって、海外の観光客に接することがあり、それは観光客のニーズに合わない観光資源を招くものとなっていた。観光客は自国より近い対馬や先島諸島に「日本」を求めてくるが、観光地が売るのは「日本」よりも地元文化であり、観光客のニーズに沿わない点も多く存在した。

2 研究実施状況の概要

二つの調査と科研申請書のための会議が主な活動であった。

（１） 対馬、釜山での調査（９月）

台湾・先島諸島だけでは、費用対効果に問題があるということから、今回、類似した地理的、歴史的環境にある対馬と韓国への調査を科研申請メンバーとともに調査を行った。日本語、韓国語の資料を収集し、その分析を行った。また、対馬の観光業者、釜山の旅行代理店、対馬に来ている韓国観光客、対馬地元居住者にインタビューを行い、この地域の越境現象に対する認識を探った。日本と韓国の不安定な関係が、逆に対馬観光客数の増加を招いている点は新たな発見であった。対馬は、竹島と同様にメディアに注目されているが、それにも関わらず、島内の様子は実際には知られておらず、彼らの「日本」イメージとの相違を生んでいた。

（２） 石垣、与那国での調査（１０月）

与那国では船による花蓮との直航運行（チャーター）が計画されている時期であった。そこでは国内観光での成功体験に基づく観光方針が決定されていた。それに対して多くの台湾人観光客を迎えていた沖縄華僑は、むしろ「日本」をイメージするような特産品の開発等を推奨していた。地元料理ではなく、和食を食べる台湾人観光客が理解できない様子であり、自文化中心主義に基づく問題が散見できる状況になっていた。このような問題はまた植民地時代の体験を現在の状況に当てはめようと

することから実は発生しており、「同じ国家に属していた点」が逆に交流を阻む状況を生んでいたことがわかった。

(3) 科研申請書作成会議(10月)

分担者、協力者を集めて申請書作成に関する会議を広島で実施した。意義や成果の見込み、問題点などに関して、対象地域の研究者から提示され、申請書のブラッシュアップにかなりの貢献となった。

3 当該年度の目標の達成状況

科研申請においては、一定程度の具体的な研究成果が見込めるものが採択される傾向にある。したがって、今回の重点研究では、ある程度、具体的な成果が見える形にして申請を行った。本調査から、先島諸島・台湾と対馬・韓国の比較による越境現象の多面的実体と形成要因の分析、生活者の視点に基づく植民地支配を含めた国家統治の再考、国境が再形成された地域の研究等の3点に関して、成果と意義が考えられるとの見通しをたてた。結果的に採択されたことを考えれば、目標を達成できたものと考えている。

特に、同一領土内にあった点、距離の近さという類似した条件と、対日感情や交渉先の都市規模の違い等の異なる条件を持つ地域の比較から近接性、植民地経験、ナショナリズム、地政学的問題、東アジアの国際政治の展開と越境現象との理論的展開を分析できる点は、重点研究を通して明確に認識した点であり、採択に貢献したものと考えている。

4 直接的効果、波及的効果

科研獲得支援の研究であるため、地域貢献上、直接的効果、波及的効果が大きいに見込まれるものではない。しかしながら、日本の調査地はいずれも「周辺」と自他ともに認識しており、離島振興政策の対象地域となっているところである。したがって、人口減少や産業不振に面している地域の課題を解決する場合に、その一助となる可能性はある。特に観光による地域活性化、なかでも海外からの観光客をターゲットとした活性化策においては、本研究で得られた国内観光での成功体験の応用にみる問題点などを活用して、助言することが可能になると思われる。

5 現時点までの成果(特許・論文・学会発表等)

論文

「台湾東部と沖縄先島諸島にみる越境現象～与那国町を中心に」、『世新日本語文研究』1、台湾世新大学日本語文学系

学会発表

日本文化人類学会第43回研究大会(5月30日 国立民族学博物館)

「台湾東部と先島諸島にみる越境・観光にみる相互理解の差異」

新聞投稿(トヨタ財団からの支援も含む)

八重山毎日新聞 2009年4月12日付 論壇

「台湾へのPRは広域で」